

刊行にあたって

波照間 永吉

琉球文学大系 編集刊行委員会委員長

琉球文学研究が始まって約二〇年が経つ。この間、伊波普猷・仲原善忠・外間善・池宮正治など多くの研究者がこの未開の大地を耕して豊饒の沃野とし、さまざまな成果物を世に送ってきた。しかし、まだこの領域のテキストを体系的に整理し、研究者をはじめ多くの人々に提供する仕事は成されていない。

「おもろさうし」や琉球歌謡のテキストについては、評価すべき仕事はなされているが、琉歌・組踊をはじめ説話、沖繩芝居、琉球和文学、琉球漢文学、そして文学を支える歴史・民俗などの基礎資料を含めた、琉球文学を一掃するテキストの制作がなされなくてはならない。琉球文学研究、そして琉球・沖縄文化研究の拡大と深化のために、研究水準を保ったテキストの整備が必要である。「琉球文学大系」を構想する所以である。

今回、名桜大学が「琉球文学大系」を構想し、その実現に向けて確たる一歩を踏み出したことは、琉球文学研究にとりまらず、ひろく琉球、沖縄文化研究の世界で特筆されることである。文学領域を主要な部分とするが、文学を表象をなす歴史・民俗などの領域についてもその必須文献を収録することとしている。これを整備し公刊することによって、琉球・沖縄文化研究は大きく裾野を広げることができるとは言い過ぎない。その概要は、全三十五巻。文学領域二十七巻、歴史領域四巻、民俗・地誌領域四巻である。これまでの研究の粋をあつめ、信頼される本文を構築し、細密な語注を施し、全巻に解説を付す。そして、現代語訳の必要な文献については可能な限り訳注も付けていく予定である。

この事業の完成によって、ユネスコが「消滅の危機に瀕した言語」とした琉球語の表現の豊かさ・多様性が多くの人々に共有されることになるだろう。未来につながる琉球語へ永遠の生命を吹きこむ仕事になるに違いない。

一九九二年、関根賢司氏は「フアンロジ―琉球弧の文学」の構想（『省察 第四号』の中で「琉球文学古典大系（あるいは全集、あるいは集成、全一〇〇巻（あるいは全六〇巻、少なくとも三十五巻）」という企画を構想しなければならない」と書いた。我々の構想の魁であることを記しておきたい。一方、氏はこれを「幻の」とし、その実現は「ほとんど絶望的だ」と書いた。しかし、今、氏が負の要素として挙げた研究者の協力態勢は整い、そして編集・刊行の経済的問題も、山里勝己前学長の思想と沖繩への篤い思いに導かれて、名桜大学が本事業を地域文化への貢献事業と位置づけることによって、道が開けた。幻ではなくなくなったのである。十年・十二年という時間は「琉球文学大系」の完成のためにむしろ短い。世紀の大事業の完成に向けて心して歩んでいきたいと思っっている。

ゆまに書房創業五〇周年記念出版。名桜大学創立二五周年、公立大学法人化一〇周年記念事業。



- 「名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会」
名譽委員長 山里勝己
委員 波照間 永吉、照屋理、山里純一、山内純一、小番達、屋良健一郎

- 【第一回配本】2022年3月刊
第1巻 おもろさうし 上
校注 波照間 永吉
校注 波照間 永吉
発行記念特価
全35巻揃定価
全35巻揃定価
ゆまに書房

申込書
\*ご注文は書店を通じてお届けいたします。
◆琉球文学大系(全35巻)(ゆまに書房刊)を セット申し込みます。
◆第 巻を 部申し込みます。
◆ご氏名 ◆電話
◆ご住所 〒

琉球文学大系 全35巻

琉球文学研究二二〇年。琉球文学のテキストを初めて集大成。

編纂 名桜大学「琉球文学大系」編集刊行委員会

本書を推薦します
青い海いろの「うちなーぐち」
中西進
沖繩、琉球」に関する書物は、日本各地の地方誌の中では、おそらく最も多量に書かれています。ところが、研究書は多くとも原典として知られる書物は意外に少ない。「おもろさうし」とか「琉球国由来記」とかと。これでは其の琉球文学には、なかなか手が届かない。

『琉球文学大系』の開始
藤井貞和
名桜大学の刊行事業「琉球文学大系」全三十五巻がいよいよ始まる。文学の領域で、歌謡、琉歌、組踊、琉狂言、演劇(日本本)、説話、和文学、漢文字、二七巻。歴史の領域で、「琉球国由来記」以下の四巻。民俗・地誌の領域で、「琉球国由来記」以下の四巻。これらから十二年間をかけて、だれもが飽強しやすく、興味や関心を掘り起こすテキスト作りが、波照間水吉さん(天著「南島祭祀歌謡の研究」の著者の総指揮のもと、練りあげられるという。私もには懐かしい名前が並ぶ。

琉球文学分野が 主導する事業の意義
高良倉吉
現今の琉球史や沖縄考古学の分野は専門化や個別化が著しく進展したために、伊波普猷の「古琉球の政治」(一九九二年)が描く包括的イメージを必要としなくなったのかもれない。学問の発展から見れば、当然のことだと思ふ。

千年後も継承される テキスト資料
佐藤優
言語は民族のアイデンティティに直結する。沖縄人のアイデンティティを確認し、継承、発展させるために琉球文学のテキスト資料を集積することが以前から待ち望まれていた。過去にこのような企画が何度か立てられたが、中途で頓挫してしまつた。琉球語を刊行するとは、まさに時機に合ったプロジェクトだ。現実的に考えた場合、これが最後のチャンスと思ふ。

ゆまに書房 電子書籍 同時刊行予定
価格等は、KinoDen/Maruzen eBook Library/EBSCO eBooks/日本電子図書館サービスほか各サービスにお問い合わせ下さい。



